



第47号
発行日 1月10日
発行所 真徳山 天林寺
発行者 伊藤文元
〒430-0905
浜松市中央区下池川町27-1
TEL (053) 471-6226
FAX (053) 471-6234

健やかにお過しください



天林寺住職

伊藤文元

皆さまあけまして

おめでとございます

令和六年申辰仏紀二五九〇年
西暦二〇二四年の新年にあたり、
檀信徒の皆様方のご健康とご多
幸を心より祈念申し上げます。

早いもので平成十一年
(一九九九)に創刊した「微笑」も
四半世紀：二十五年を迎えます。
種々の思い出もありますが、読
者層も替わってきておりますの
で、当職が担当しております
この欄も模様替えを致しました。

檀信徒の皆さまより、色々と
聞きたいことがあるとのことで
して「微笑」編集部より質問に答
えるよう要請が来ておりますの
で、早速取り掛かりましょう。

『お尋ね、お応えします』

Q 天林寺の創建はどなたがい
つ頃、また方丈は何代目に
あたられますか？

文安2年(一四四五)と言いま
すから、ざっと五百八十年前の
こと、普濟寺に学んだ傑堂義俊
禅師が実質御開山となります。

戦災にてお寺の資料を焼失し
たため一般の史料にしか当たれ
ませんが、室町時代：南北朝が
合体し、栄華を極めた足利義満
が逝去。独裁的な政治体制が崩
れ、家督を含め新たな権力争い
がくすぶり始め、やがて応仁の
乱(一四六七〜七七)に発展する
前の、混沌とした時代でしたね。
世のならいで、中央の権力争

いの波は守護職をはじめ各地の
地侍や土豪へも波及し、特に都
周辺の大和・河内などは大混乱。
痛手を被る庶民の間でも不安や
生活苦から一揆をたくらむ動き
も生まれ、不穏な空気が世の中
を覆っていました。当地でも例
にもれず、従来の遠江守護職に
替わり尾張守護の斯波氏が兼務
後に今川氏との争いの種となっ
たり、都でも斯波一族は家督争
いで応仁の乱に巻き込まれてい
きました。

Q 庶民の不安は募るばかり？

伝わるころによるとこの時
期、当地では不安な空気の中、民
心を鎮めるべく鴨江寺や方広寺
(三七一開創)など各宗派の活
動が活発のようでした。

私たちが曹洞宗においても如仲
天間が森町飯田に崇信寺を開
創、その後も大洞院、一雲斎な
ど教線を拡げつつありました
(二四〇一)。

一方、道元禅師の弟子で永平
寺↓(二度の入宋)↓熊本・大慈
寺開祖と活躍した、寒巖義尹禅
師の五代後のお弟子華蔵義曇禅
師が熊本より来訪、時の城主・吉
良氏に請われて本能山隨縁寺を
開きました。

しかし重なる水難に遭い、三
年後に現在地に移転、広沢山普

濟寺と改めました。私たちの本
寺でして、天林寺の開山・傑堂義
俊も華蔵禅師に師事していたの
です。

華蔵門下には特に優れた十三
人の弟子がおりまして、愛知、山
梨、静岡県などの東海地方に
次々と教線を拡げていきました。
ちなみにこの十三人：十四カ寺
は普濟寺十三門派と呼ばれ、輪
番で本寺の運営にあたりると共に、
各地にて活発に活動し曹洞宗の
全国展開にも寄与していったの
でした。

さて、天林寺開山の傑堂義俊
(一四二四〜八九)は紀州熊野の
生まれとされ、先述の十三人の
中でも旺盛な活動派で当寺のほ
か渥美半島の常光寺様も開創さ
れています。

残るご質問ですが、現・住職は
三十二世にあたります。室町時
代からの、六百年に及ぶ当山の
担い手として非力ではありませ
んが努めさせていただいております。



微笑

不意打ち

天林寺寺族 伊藤 諦子

三年ほど前の話である。

七十七歳になった私の喜寿の祝いを、浜松在住の子供一家三組が集まり祝ってもらった。

夕方六時半から町内の「ホテルコンコルド」の和食処「堂満」での会食であった。

長女は東京、次女はミラノ在住なので不参加。三女母娘二人、四女一家四人、五女一家三人、我々夫婦の総勢十一人である。孫は中学生から一歳児まで四人、賑やかこの上もない。大人達の間を三歳の男児尚太郎君、一歳の女兒ほのみちゃんが、嬉しくておちゃらけて歩き廻り愛嬌を振りまき笑いが絶えない。

誕生会は和食だったので「めで鯛」、立派な姿焼きが出されるに及んで、記念撮影となった。

「ハイ、ポーズ！」と皆笑顔でカメラに納まる。と間髪を容れず嬉しいプレゼント。老齢の自分では晴れがまし過ぎて選べない暖色系の華やかで美しいセーター!! 贈り物ということ得意気に着れそうである。

セーターに添えて皆それぞれに思いを書いてくれた手紙、これがまた嬉しい限り。一枚毎に読み上げ「有難いなあ」と感じ入っていると四女の知子がふとつぶやいたのである。

「子供の頃、早朝からお父さんとお母さんは働いていて、勿論夜も私達が寝る時も起きていらしたから、二人のパジャマ姿見たことがなかったわね!」と。

この不意打ちに、今までニコニコ微笑んだり、大声で愉快に笑っていた私、急に顔が歪んで涙腺どつと開いて、あふれる涙をとどめる術がなかったのである。

五人はすべて皆私から生まれた子供だが、皆それぞれ先祖からいただいた持ち味は幅広く、やはり宝物という他はない。

こんな素晴らしい宝物を五つも持っている私は果報者というべきであろう。

四女の知子の観察力には昔から驚かされてきたが、これまた忘れ得ぬ不意打ちの出来ごとのひとつである。



及ばずながら…

天林寺徒弟 長谷川敏正

永平寺に於ける丸四年の修行生活の中では、夜の七時から九時の間は、通常、夜の坐禅「夜坐」の時間となっています。約四十分の坐禅を二回坐るのですが、月に何度かは代わりに、講義やお習字、あるいは御詠歌を勉強する時間にもあてられます。今回はその講義の際に、ある御老僧がよく仰しゃられていた言葉「及ばずながら…」をご紹介します。

そのままの意味では「及ばないけれども…」や「目標には届いていないが…」との感じですが、この御老僧のニュアンスでは、「…」のところが大事で「及ばないながらも、できうる限りの最善を尽くす」とか、「目標には届いていないが、少しでも目標に近づけてみせる…励む」と言う意味で使っていたのではないかなと思っています。

仏教徒が守るべきルールである「戒」の中には不殺生戒(生きとし生けるものを殺さない)や不妄語戒(嘘をつかない)といっ

た、当り前の事柄だけれども一度も破らず、必ず守り抜かれるかと問われた場合、実はそうとは言えないものがあります。「生きとし生けるもの」を動植物すべてと考えれば、人間は食べるものがなくなってしまう。草刈りや木工製品などもダメですし、綿や麻などの布も編めない。また、無意識に虫を踏んでしまうこともあるでしょう。とはいももの「嘘も方便」という言葉もあって、相手に敢えて話す優しさの嘘もあります。

このように仏教では、守るべき「戒」の中でとにかく守れ!というだけではなく、いい意味での寛容さがあり、守ろうと精進することが大切であり、たとえ不首尾であっても、その精進してきたことを否定するものではない考え方があります。

人生における夢や目標に対しても同様で、そこに向かって挑み、精進し続けることが大事。何事も、結果は後から付いてくるものであると思います。 合掌



25歳の【微笑】をふり返る

創刊号(平成11年…一九九九年)より

「発刊のことば」として

方丈が述べているのは

①従来ですと年賀状を差し上げてはいるが、本年より寺報を差し上げることにしたとの冒頭のご挨拶。

②タイトルはお釈迦様の故事「拈華微笑」から「微笑」にしたことが綴られていきます。

ちなみに拈華微笑とは、お釈迦さまが靈鷲山にて大勢のお弟子さんの前で金波羅華という花を拈ってまばたかれました(拈華瞬目)。

その折、多くの弟子たち



微笑創刊号

ちが沈黙する中で唯一、迦葉尊者だけがにっこり微笑した(破顔微笑)と伝わっています。

つまり、拈華瞬目に対して破顔微笑：言葉でなく態度で示されたという故事から、お寺と檀信徒の皆様の間も同様に、「互いの気持ち繋がついていくように！」との思いから命名された、と述べられています。

③境内墓地整備事業の進捗について報告をしています。

平成九年より始まった整備事業の進み具合を説明するとともに、今後も檀信徒様のご理解とご協力を要請しています。

また、春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪

さえてすずしかりけりと、道元禅師の歌をお借りし、「花のお寺」を目指したいと花づくりを心掛けている旨を結びにして創刊号をお届けしています。

実際、二十年余を経て境内の花の数は増え、季節々々に花を愛でる人の姿を見るようになりました。

臨時増刊号(平成11年)より緊急報告 山門があぶない！

…と、物騒な見出しが目

昭和三十九年建立の山門が地盤沈下により南側に傾いている、二階部分は床梁が折れているため倒壊の恐れあり、という。また濡れ縁からの浸水で天井の一部が腐りかけている、二階の梁は折れる寸前…と専門家から数々の指摘があり、早急措置が求められると緊張が伝えられた。

継続中の墓地整備に加え、建築後十三年を迎えた本堂の塗装工事が進む中での予想だにしない「緊急事態発生」である。方丈はもとより檀家総代の皆さまのご心痛はいかばかりか…と過ぎし日を回想しながら思いやる。

第三・四・五号(平成12、13年)では、

…しかし、早めの措置が功を奏したのか、幸い大き

な事故もなく、本堂の工事は十一年の暮れには終了。皆様にご協力いただいた山門修復は躯体を本堂わきに移動、基礎からやり直す大工事になったものの十二年の十月に無事終了した。その後は、ご覧いただくように堂々たる構えを示している。

一方、創刊号から始まった総代様方のご寄稿文は回を重ねるごとに個人的なお話が披露され、読者の目を引いた。

筑前琵琶が鳴り響きわたる。秋のお彼岸には「清興の会」が開かれている。お墓参りの折に、しばし楽しまれた方も多いと思う。

たびたび落語・曲芸などは催されたが、非常に珍しい筑前琵琶が奏でられた。元タカラジエヌながら琵琶師範の家を継がれた上原まりさんが、『道元さまのご生涯』を熱演された(十二年九月)。

「仏教に親しむ会」スタートする。

宗教研究家のひろさちや先生をお迎えして『ほ

とけさまの物差し』のお話を伺う。

会の命名者でもある先生は、その後三回も出講いただき会の基礎固めに尽力された。おかげさまで『親しむ会』は、約二十二年にわたり三十二回開催(中日新聞社協賛)し、檀信徒をはじめ市民の皆さんにも親しまれた。

近 聞 遠 望

お知らせ申し上げます。

平成二十三年より当山にお勤くださった景浦敬信師が、令和五年を限り如意寺(浜松市馬郡町五三一五番地)へ住職として赴きます。

皆さまには十二年の長きにわたりご厚情を賜りありがとうございます。

法寿院(浜松市寺脇町一〇三三番地)様にて令和六年十月二五・二六日に晋山結制が営まれます。

すでにご住職としてお勤めされている伊藤晃裕師であるが長男健太氏を首座和尚に、勤められます。

1) 報告いたします

大般若会・新年拝賀式 一月十一日

青天の下、風少ないものの冷気は厳しく、緊張の朝を迎えた。

まず、堂内を清める散華を終え法要が始まる。

かの玄奘三蔵法師が伝えた六百巻の「大般若経」が転読され、須弥壇の般若札にご家庭の幸せや平安の祈りが込められる。法要後、檀信徒さまに郵送されるのである。

引き続き、ご開山傑堂義俊導師への新年のご挨拶：「拝賀式」が営まれ、当山方丈をはじめ、参会者が順次焼香、今日あることへの感謝と供養の心を表された。

寒い雨の中、静かな彼岸の入り 春の彼岸法要 三月十八日

昨日からの寒波の襲来で県下の気温は前日より十度も低い。

導師の文元方丈が入堂される。続くは侍者、侍香の僧たち。

案内の言葉に従い導師に倣って大衆、参会者一同も三拝。修証義が唱えられる。

じっと目を閉じ聴き入る人。時々お経の文言にうなずく人。中には首をたれ全身で聴く人もある：それぞれがご供養の姿であろう。

読経が続く中、和尚様の手によって回し香炉が参会者一人ひとりに廻され、本堂を一巡りする。堂内は香に包まれ、ほどなく彼岸会法要は無事終了した。

大聖寺・伊藤智裕さまがご導師 ご開山忌法要 四月十一日

ご開山・傑堂義俊導師の五三一回目の遠忌と三一世大圓禪覚大和尚の二七回忌法要が営まれ、浜松市幸の眞道山大聖寺十四世伊藤智裕ご住職がご導師を勤められた。

定刻十一時、鐘と鉦が呼応。間を置かず送迎、天林寺方丈、導師の智裕老師、侍者らの順で入堂される。

導師は須弥壇のご開山像を仰ぎ、線香を手に一札、香を焼き一礼。代々のご住職さまにもご挨拶をされた後、献湯菓茶を終えられる。続く焼香、

大衆九拝から参同契・宝鏡三昧の読経、総代さま焼香までを肅々と進められ退堂された。



山門施食会(孟蘭盆会) 七月十五日 昨年に引き続き、「寺施餓鬼」は

一時と三時の二回に分かれて勤められた。受付で感

染予防のゴム手袋を渡され戸惑う

も「精霊棚の水向け用」の言葉に納得される。コロナ禍のもたらした新風景である。

大鐘・小鉦の予告を経て、導師の文元方丈が入堂。涼やかな衣をひるがせ、きびきびと焼香、礼拝を重ねられる。僧が「合掌、礼拝！」と一声。皆は波打つよう倣い、全堂挙げて法要に入る。

般若心経を読み上げ後、導師が精霊棚に對面する位置に移動、山門施食会に入り、読経。終わると導師は諸精霊の供養を告げる。続いて経をはさみ、個々に新仏の戒名を奉読された。

続いて経が続く中、新亡家のご家族方は精霊棚に向い水を手向け、ねんごろにご冥福を祈った。

夕闇迫る十九時、方丈はじめ僧侶が山門前にご出座、精霊送りの法要が営まれた。

秋の彼岸法要 九月二十日

彼岸の法要は、ご開山傑堂義俊さまから、ご先代大圓禪覚大和尚



ご案内いたします

●二月十二日(祭) 稻荷大祭

コロナ禍でお休みしてしまいたがにぎやかに開催します。お揃いでのご来山をお待ちしています。九時半→三時(予定)

◎福引 (本堂) 十時より

◎奉納茶会(天真閣) 十時より

◎祈祷会 (稻荷堂) 十五時より

◎投げ餅 法要終了後

